

生活の伝承 9

発行者 民家園のつどい
会長 斎藤久一
発行所 福島市五老内町3番1号
福島市教育委員会
文化課内
民家園のつどい



節分の行事（旧阿部家）

うに仲間といひどうでこなでふたりでこうふれなす。そばつてこいきてもいきだがし。なまくいはあがす。こゝのよへとさんち

ではなくて、私の少年の頃の遊びの中で合唱したものでした。

一から十までを、ことばに調子よく歌いつまれていて、ドラマがある

ように思われませんか。

一人ではなくて、みんなさうして遊ぶ仲間の間には、いつか、ゴタゴタがおきて、喧嘩になつたりしました。その喧嘩は次の日まで続くこともあります。私が少しうまく遊べる仲間にもどうて遊べました。一人では来ないでみんなを呼び合つて遊ぼう、といつてます。よばつて、というのは、呼び合つてのことです。いつもの喧嘩仲間が集まつてくるのでした。

しかも、その仲間には、いつも優劣があつて、体の弱い者や、同じ遊びが下手な者がいたりしても決して仲間はずれにすることはなく、名前は結構なものではありませんでしたが、あぶら虫・あぶらっこなどといつて、遊びにいつもまざつっていました。そのようなとき、大将になる者が必要、それを取りしきつてくれていたのです。

私の少年の頃の遊び場は多方面で、お寺の境内であつたり、向い山の広場であつたり、町の中の電信柱のまわりであつたりしました。

時折、このうたを「ずさんだりすると、あぶら虫の時が多くつた私だったのですが、そこに集つて仲間たちと一緒に、向い山の上から、線路を走つていく汽車を見送りながら、みんなで、バンザイといつたことを思い出すことができるのです。

巻頭言

わらべうた 仲間呼び

上に書いた、わらべうたは、数えうたに入れてもよいもので、ひふみよいむなやこ十と十句にまとめられています。福島市内採集のもの

ごせやける

斎藤久一

去年の暮、一円と五円玉を貯めておいたビンを近くの信金で年末共同募金に出したところ、千円に足らなかつた。千円といくらかを足して千九百九十六円としてNHKに預託した。窓口娘にこの金額わかる?と云つたらケゲンそう。来年は一円殖やしてきます、と云つたらニッコリ。わが意が通じたことで、まことにさわやかだつた。

明けて今年の元日、毎年のごとく普提寺で除夜の鐘を撞き、本堂開山堂に詣で清々しい気分で新年を迎えることができた。

ところが、新年早々新聞テレビを賑わす多彩にして悪氣極まる事件が報じられている。〇一五七の問題は一応鎮静化したものとはい、未解決問題等も含め順不同ながら並べてみると、

- 沖縄の基地未解決問題

- ペリーの日本大使館人質事件

- ナホトカ号の原油流出事故

- ミドリ十字と学者の癒着

- オウム麻原殺人者裁判の遅々たる審理

- 信用組合や銀行行員の相づぐ横領事件

- 地方自治体のカラ出張と食糧費問題

- 官官接待とそれに附隨した贈収賄事件

- KKC山本一郎の詐欺事件

時代を意味する言葉なのである。

「上正しからざれば下乱れる」という。

なんとも、後世焼けることばかり多く、戦

後の教育の是非が問われる時にきていくよ

うに思えてならない。

末法の時代といわれた鎌倉時代に、板碑が多く建てられたという。しかば、われら

は現今何を建てたらよいのでしょうか。

五十年ぶりに再会した道標

山田政雄

昭和二十二年四月一日、私が十八歳の春東北電力に入社した。

最初の勤務地は信夫郡信夫村の大森変電所であった。この変電所は大森鉱山(大森城跡)が盛んな頃に鉱山専用の変電所として建設された一人勤務の変電所である。

福島市内の家から信夫村までは九kmほどの距離があつた。当時は物資不足で自転車もチューブの変わりにスポンジを入れたノーパンクの自転車が人気を呼んだ時代で、私もこのノーパンクの自転車で通勤した。

「ごせ」は「後世」が原語で、後世を憂える言葉として、あの世・ごせい・のちの世・のちの時代・後世末世・かなたの世・未来に生きるべき世界・現世前世に対して死後にうまれる世・のちの世継ぎ、子孫のこと。などと。

その「後世」が焼けるのだから、灰となり雲散霧消してしまう、即ち灰となり無となるべき世のちの世継ぎ、子孫のこと。などと。

小さなそば屋があり、今も昔のまま看板を掛け健在で営業している。そば屋さんの南側は丁字路になつて、旧大森街道が西に

たが、あのときの道標は姿を消していた。こ



伸びている。その道路の角に荒物雜貨店があつた。その店の片側は急斜面の土手になつていて川が流れている。その川岸に高さ一

五〇cm幅三〇cmほどの石柱の道標が建つていた。道標を見た瞬間江戸時代から今日まで長期間に亘り風雨に耐えて現在も建つて

いる道標に感動し、その場に釘づけになつてしまつた。そのときのことは今でも瞼の底にはっきりと記憶している。道標には太文字で

「左江戸海道」と刻み込まれていた。この場所は事故防止のため有刺鉄線の柵が施されているため側面の文字はどうしても見ることができなかつた。その後定期異動により県内数ヶ所の変電所を勤務し、昭和六十年二月福島で定年を迎えた。

そして再び道標の建つている場所を訪れ



のたび文化財と縁があつて平成八年八月真夏の太陽が照りつける午後、福島市立第一中学校の校庭で五十年ぶりにあのときの道標と再会したのである。長い歳月を物語るよう道標は見間違うほどに色艶が失われ年老いた道標に変っていた。そしてあのとき見るとの出来なかつた側面には「右山王土湯道」と刻み込まれていた。江戸時代山王道は重要な街道のひとつに数えられて山王道をへて板谷峠に至り米沢へ続く米沢街道であつた。また道標の裏面に建立年号等の刻字はあつたが判読できなかつた。この道標は河川改修工事に伴い昭和五十年頃福島市立第一中学校の校庭に移設保存されたもので私にとっては心に残る道標である。

要二 やんの茶のみ話

—その六—

加藤重芳

【屁の話】

●百姓の屁
田植えの時、誰かが思いつきり大きい屁をすると、皆がよろこんで「ならさつたならさつた」といつて大喜びする。
大きい屁は、雷様がなるようで、米がよく実る前兆だといった。

●けちんばの屁

けちんばの百姓は、催した屁は我慢して、家の田んぼの方さいって、思いつきりやつてから

「どうだ、ただの風よりよかんべ」

●土方の屁

土方の日当は、その日の天候でいろいろな割増がついた。

普通の日は、出一三分 雨の日は 濡

七分 早出 残業は一分などになつていて。
帰りしなに、誰かが大きい屁でもしようものなら「今日はブーかついた」といつてみんなで笑つた。

【大たんがら】

【わらびの恩】

愛宕原の仲一やんが、たんがら造りしたんだ。

大きい方がいいと思って、村一番のたんがらこえて、りつぱに出来た。

昔、なが虫(蛇)が、わらびに助けられたことがあつた。

若し、山で蛇に出会つたときは「わらびの恩を忘れんな」と唱えうと、蛇はおとなしくなる。

そのことを、唱つたうたがある。

長虫よ

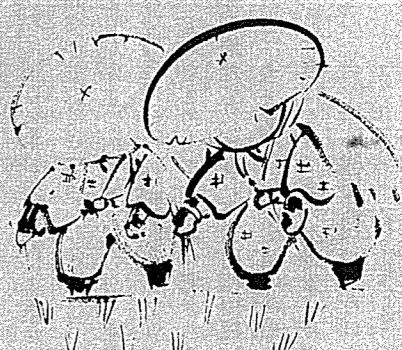
わらびの恩を忘れんな

春の野原でひる寝して

ちがやにさされた そんどきに

下からそと持ちあげて

命を助けて下さつた
わらびの恩を忘れたか



やつちゃん(四)

丹治伸吉

ら仏様が硬化しないうちに足を曲げておき、
その隙間にれる糠袋も用意する。
さて名主の仕事としては、假木戸の作製、
辻灯籠、籠頭五色の旗の準備や穴掘人に酒
と昼飯を届ける。

父は四十八歳のある朝起きてこない。大
粒の涙をこぼし悔しがっていた。軽い中氣と
母はいた。何日かで起きることは出来たが
医者の薬以外に、渋いものや松葉などいろ
いろ服用したようだ。仕事をするまでは三
年位かかったと思う。

その間の村付合は十五歳のやつちゃんが
受持ち、母は入ったことのない湿田に短足を
浸すことになった。その頃の農業の基本肥
料は、堆肥、草木灰、人糞尿で、早速汲取り
を行なうが大小別で粘り強く、酸味をおびた
臭は目をつぶっていても、息をとめても吐き
氣味になる。後で見ていた児供が「オラ男に
生んにくくてよかつた」といつていたが同感。

やつちゃんより五軒上の家に爺様が居た。
この人も丁髷を結っていたそうだが覚えてい
ない。骨太のがつちりで無口はその当時の馬
方タイプでも後尾の人だろう。重病になれ
ば戸板と竹で震興を作り、又どこから借り
てきたのか本物の網代賀籠に乗せ福島へ向
う。大概是主人か子供でその家の大切な人
である。普通は病気になれば医者を八丁目
から招ぶ、迎え送りは近所の人が頼まれる。
人力車の後押しで先綱を曳くこともある。

この爺様が亡くなつた。今でもそつたが、
念佛講というものがあつて、名主は腰籠を持
つて「十銭の差し拾」をしながら全戸に仕舞
日を告げる(この差し拾いの錢は 陸尺人足
の酒代としたものが始まつたといふ。今は花
輪代となる)

江戸時代村名主は不幸のあつた家に一週
間又は四十九日の間毎日顔を出した。その
名残りで現も葬の世話ををするものを「名主」
と呼んでいる。

名主の下に穴掘り一人、陸尺四人が順送
りの役につく。近所の人達はそれぞれ手伝
いの分担をきめる。告人二人一組で大森と
か水原とかの主だつた親類へ告げ、そこでは
自主的に子親類に告げる。

買出入も一人、必要な葬具類や精進料理
の材料を仕入れに出かけるが、いずれも徒
歩で先方で酒を振舞れるから仕事に似合ず
上機嫌で帰つてくる。

穴掘りは名主の指図を受け墓穴を掘る。
新地もあるが大概は掘り返しだから古い仏
が出てくる。それはとつて置き新仏と一緒に戻す。陸尺は額に三角紙をつけ輿を担ぐ。
この爺様をかつたのがやつちゃんの初体
験。何しろ担ぎ手の背丈が揃わない上重量
がるので潰れそうになり、百米位のところ
で左右交代してもらつた。こんどは交代した
爺様が「これは利く」と半腰になり又百米
ぐらいで休憩をとつた。

尚、葬列が神社前を通るときは旗杭から
旗杭に繩を張り渡し(それが移らない爲)

その後これに替り名主が大の字に立塞がつ
たが戦後それもなくなつた。
寺の庭で左廻り三遍する。重いから左先
棒を軸に小廻りになる。被着をかぶつて善の
綱を曳いていた女人の人らは、振り廻される
格好になり離れてしまう。本堂前に用意さ
れた台の上に輿を安置、読経引道の後棺を
棺方と共に棺の下からもう一本麻縄を通して
両端を四人でもち静かに下す。落ちついたら
三角紙などを入れ、身内の者から一握りの
土を入れ、大目の竹を立て(五色の旗の)埋
戻す。竹は六日間の朝参りのとき、とんとん
と突き会話をするのだがすぐ動かなくなる。
残りの竹は土饅頭の四方に折り差し大除と
する。お供え物を供え終り、喪主が履いてきた草鞋、女人の草履などは墓地の入口に脱ぎ裸足で帰る。家の前に用意された塩水で全員口を漱ぎ手を清める。我々陸尺たちは圃場裡端で精進あげを馳走になり帰る。昔からお汁に豆腐を使うときは、鍋が煮立つた上から豆腐を掌にのせ庖丁で切り下したものだが、葬式の日だけ采の目に切つた。それが今ではどこでも通常采の目であるのは豆腐が軟くて掌にのらないからか。

話は前に戻るが、ねんごろに供養された仏様が縁側より出棺されて、名主が早速假木戸を外す。待ちかねた法印が玄関より入り、神棚の前に小机を出させ灯明、塩、水、線香などと白米一斤を盆にのせ、その上におひねりをあげさせ「佛祓」の祈禱をする。このとき長い紙に何やら書くが、これを何処に納るか判らなかつた。今は住職様が行うが御幣束をたてこれを清めの水桶にたてる。

母の姪の御祝儀に出席することになった。

諸事万端自家製だから大変だが案外無事に終る。土地の長老たちが包丁を持って集り料理全般を受持ち、やつちゃんはユベシみた手答えのない餅をつかされた。寿留女、勝男節子生婦などの結納品慰斗、水引き作りなどの手捌は見事なもので見惚れた。

向うからの花婿と見参が着いたのは昼頃であり、それを充分もてなして短かい日の暮れた夜道を提灯さげて花嫁の嫁家に急いだ。屋敷の若衆たちが道端に篝を焚き待ちかねていた。到着の謡をうたい、花嫁はおんぶされ、豆柄の焚火をまいて家に入った。我々は縁側から上り所定の座につき、受渡しの謡を終り餡餅が出された。空腹だったが給仕人がこないのでこれも一膳の決りかと我慢した。皆は酒を飲んでいる。

いいよお開きとなり庭におり東山に黄色い月があがるのを見てやれやれと思ったら後引の酒をドンブリ風の入物について出された。向うは裸足で飛びおり追いかけ廻された。向うは裸足で飛びおり追いかけ廻すから受取る。叔父にどうすると聞いたらその辺りに零せという。皆もふらふらしながらこぼしていた。前は桑畠、いざ帰路にいくと先程の酔っぱらいはどこの人とばかり急ぐ。家に着いたらやつちゃんは朝食、先ほどの黄色い月は太陽だった。寝る。

やつちゃんは、小さいとき中耳炎を患つて大原病院に通った。当時病院の玄関は第一小学校に面して多くの樹木があり薄暗かった。二階の耳鼻咽喉科で大原先生と岩永?先生が反射鏡を口にくわえて治療していた。やつちゃんの病院通いは長かった。毎晩のように痛いと泣くので、そのたび母は抱え

て外に出た。明るくなつたら医者にゆく」と

泣くやつちゃんを「よしよしいんべな」と慰めてくれた。父が風呂でとつぱぐつて沈めたのが原因というのに。

父母には仕事があり毎日病院へつれて行けないので「つち姉」を頼んだ。やつちゃんより八歳上というがその頃はでこぼこの砂利

道で、信夫橋の手前など荷を積んだ馬車が一気に登れなかつた程の急坂であった。ここ

で乳母車がひっくり返りやつちゃんは投げだされそうで、帰つて来て母にそのことを告げたらしいが、つち姉の狼狽ぶりを思うと申訳がない。このことを回想して父母はよくも小さい体で肩ほどもある乳母車を押して伏拝坂を通つてくれたと話していた。つち姉がい

弟妹まで「姉」とよんでいる。

やつちゃんのお母さんは「ほいど」にもお茶を馳走した。有難がつてお礼の手紙を出すと云つた人もいたそうだが一枚も来たことないと笑っていた。母は一日一疋(二反)の機を織つていたので糸粧の運搬は専らやつちゃんの仕事である。松川の「りーちゃんがユタン(繭を入れた大きな袋)を運んできて矢立の筆をなめながら専門に契約した家へ配分して置く。糸を繰る人は年配の婦人が多く、常に釜を煮たておくため熱いので坐り台に片膝をたて、片肌を脱ぎしほんだ乳房もかまわず、ほつれ毛と汗を防ぐため鉢巻を締めた姿はいまどきの裸婦像より美しい。

やつちゃんの「ほいど」にもお茶を馳走した。有難がつてお礼の手紙を出すと云つた人もいたそうだが一枚も来たことないと笑っていた。母は一日一疋(二反)の機を織つていたので糸粧の運搬は専らやつちゃんの仕事である。松川の「りーちゃんがユタン(繭を入れた大きな袋)を運んできて矢立の筆をなめながら専門に契約した家へ配分して置く。糸を繰る人は年配の婦人が多く、常に釜を煮たておくため熱いので坐り台に片膝をたて、片肌を脱ぎしほんだ乳房もかまわず、ほつれ毛と汗を防ぐため鉢巻を締めた姿はいまどきの裸婦像より美しい。

以上みてきた白を別に立白とい

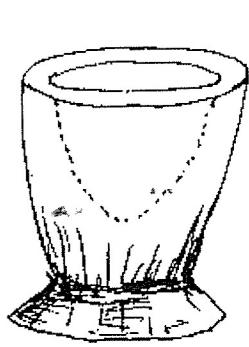
白には つき臼 と ひき臼 とがある。

つき臼は、餅をついたり、穀物の精白に用いるほか製粉にも用いてきた。このつき臼はつかれる臼と共に、つくための 杵 がついで、足で肩ほどもある乳母車を押して伏拝坂を通つてくれたと話していた。つち姉がい

つき臼の材料は、木を用いるが、米つき水車に使われている臼は石のものが多い。しかし杵は木である。

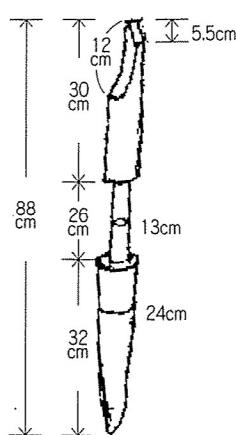
つき臼の材料には、桙などの堅い木を用いるが、精米用のものは概して大きく臼の内側は、穀粒がついた場合に臼の中で反転しやすい様に内削りが深くぼられてい。

杵には、縦きねと 横きね があつて餅つき用の杵は横に柄をつけた。これが横ぎねで、お月様で兎が餅をつく杵は縦きねといつて。精米用(米つき臼)のものは横ぎねで概して大きく オンノレ という木で作る。しかもその先端は内側に削つてあり、兎の餅つき用の杵とは違つて。ところで、結婚式の時の餅つきには、細木の先端を丸めた杵をもつて数人が一しょに餅つきをすることがあるが、千本杵という名がある。あれも縦きねである。しかしこの杵は中程の持つ所が細くはなつてない。



秋山政一

白のはなし



つき臼の一種に 踏み臼 とよばれる石製の臼があつて、これは杵が挺子状になつている棒の一端についていて、杵の反対の一端を足で踏み、杵の上下動を利用して米や麦の精白に用いてきた。

である。

民家園には以上のようなつき臼のなかに馬場家で古くから使つていたという形のかわつた つき臼 がある。

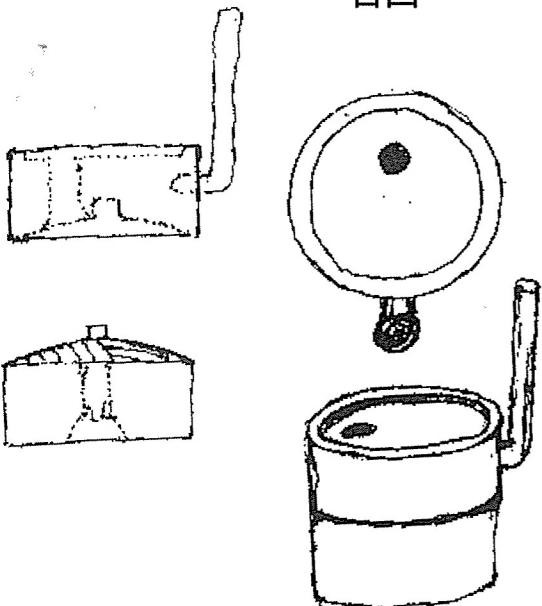
臼の高さは六〇センチで直径内径は三八センチである。ふしぎなことに、どこにもある餅つき臼とはちがつて、臼の底が平らではなく深く尖つている。

さらに杵は、一方の先端は削られて先がこれまた尖つているのである。また他の一方は厚いへら状につくられている。

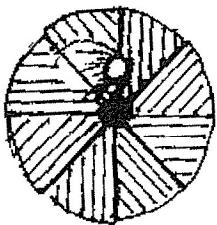
馬場家ではこの臼で、細かい粒の粟や稗を精白して食べていただと。粒の細かい穀物を精白するために考え出された臼であった。その上、尖つた方の反対の厚いスプーン状に作られているへら状のものは、臼の底の方にかたよっている穀物をかきませるために工夫であったものと思われる。こうして、馬場家では粟や稗を食糧にしていたものでその土地によって、必要に応じた道具の工夫が加えられ、民具がつくられることを示している。

次にひき臼についてみよう。ひき臼は、上臼と下臼とに分かれていて、下臼は固定して動かないようにし、心棒をさし込み、その上に上臼を重ね、心棒を中心にして手で廻して脱穀や製粉をするのに用いている。

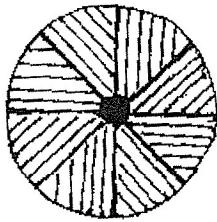
石臼



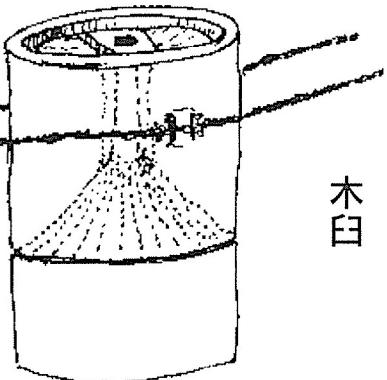
上臼



下臼



木臼



りと反対に)に廻す。(右手で把手を握り左に廻しながら、左手で上臼の穴から粉にしたい物を入れ、反し手で、石臼のへりを引きながら廻す)この時の力の入れ方は石臼を廻す力は引く方が多いという。

こうして上臼と下臼の間にはさまれた穀物などは、めじの摺合せによつて一左廻りによつて、臼の接する面の傾斜と、めじの組み合せの中で摺りつぶれて臼の間から、摺り出されるのである。この時の石臼のめじを切る「どど」臼の傾斜は、民具として注目すべきことである。

また、その民具の使い方にも次のように着目してみることができる。

例えば、くだき米を用いて団子の粉をつくるとき(製粉)は石臼で粉にした。このときのことを粉をひくといつた。

また、くだき米を一度水にひたして木臼でついて粉にして用いたが、この時は同じ粉をつくることを粉をはたくといつてきた。同じ粉をつくることをひいて作ることと、はたいて作るといつてるのは、その作り方を説明していることであるといふことも、臼にまつわる先輩の技術とみられることがある。

木臼も、石臼と同じで、上下臼があり、下臼を固定して、上臼につけた綱を二人でズコ、ズコと交互に引いて、臼の上から入れた糊をひいて糊殻を摺り、上下の臼の摺り合せから出るようにするのである。

木臼は軽いので、脱穀にはよく用いらるという。

このひき臼には石を用いたものを、石臼、丸太を用いたものを木臼、そのほか竹のたがにあんだ筒状のものに粘土をつめ、その間に堅い小板(カシなど)をはさんで、箆として用いるが、土臼—地方ではこれを土摺臼(どざるま)という—である。

石臼は上臼と下臼の接する面は上臼は凹に下臼は凸に仕上げ上下ともに八区画に割りこみ)をつけ、上臼と下臼を重ね、上臼の穴から米粒を入れて左廻り(時計の針の廻り)

木臼—どざるす—も、上下の臼があつて、木臼と同じ方式であるが、これは、石臼と同じように左廻りに引廻すものである。臼が重いので、時には三~四人が力を合せて引廻すのが普通となつていて。下臼と上臼の組み合せも、摺り合わせて糊が外へ摺り落ちるよう傾斜をつけてつくられている。

以上のように、それぞれの民具には、その目的を達するまでにはたくさん工夫が加えられ、ここまで来たもので、実際に使いながらのくりかえしの努力は、こまかに見れば見るほどすばらしいことが見えてくるようである。

